

Title	ナバテア王オボダスの神格化について
Sub Title	A study of the Divine Kingship : the deification of the Nabataean Kings
Author	小川, 英雄(Ogawa, Hideo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1962
Jtitle	史学 Vol.35, No.2/3 (1962. 12) ,p.203(359)- 238(394)
JaLC DOI	
Abstract	Almost every Hellenistic state had deified rulers and it was not only the powerful Diadochi but petty native rulers of minor kingdoms that received divine honour, when their courts were imbued with several oriental ideas and customs. The divine kingship itself was never new one, but it was a usual practice of the ancient (pre-Hellenistic) Orient. And studies of the apotheosis of Hellenistic kings, especially of native ones, are also important not only for the history of the Hellenistic world itself, but for the exposition of the origin and reason of this practice. So this monograph treated the divine kingship of the Nabataeans, because in their case not mythologically but factually the development of this native (Arab) people from their tribal community to the kingdom and attest the formation of the divine kingship directly in process of this development (not through myths, theological theories nor mythological rulers that most of ancient peoples had. The writer summarized as follows (1) there would be no apotheosis of the ruler without his claim to absolute proprietorship, and therefore this practice is proper to the society governed by the king and not by the tribal chieftain and accustomed to private property, (2) one of the early kings might have been deified by his greatness, but the royal blood itself was always sacred, (3) this sacred blood was considered to come down from Dusares, the great vegetation god of the nation, and thus they believed that the king was able to assure the people of annual fecundity of the nature, being the epiphany of this god, (4) such an institution was objectively a mean of exaction but subjectively of peace and prosperity both to the king and to the people.
Notes	間崎万里先生頌寿記念
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19621200-0203

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ナバテア王オボダスの神格化について

小 川 英 雄

一、ナバテア王神格化の歴史的條件

古代国家に於ける支配者の神格化は、社会発展のその段階での宗教の社会的機能や支配権力の性格を知る上で重要な問題である。原始社会では、社会の機能は現実¹に於いても、当時の人々の思惟の上でも、今よりはるかに分ち難かつたが、古代国家が生れ、階級が分化し、分業が進むにつれて、それが幾つかの機能に分化して、存在としてはより客観化され、思惟の中ではより抽象化されて、支配のための、又それに対する戦いのための道具として使われることが可能になった。従つて、社会現象の中の宗教的部分も、現実の生活の中に於いて、又人々の思惟の中に於いて、独自の分野を形成することになり、一方では支配権力の妥当性を認めさせ、権力に神祕性を与えるために奉仕し、他方ではそれに服従又は反抗する際の「人民の世界観¹」として、社会生活全般の変更や文化価値の転換を要求することもあつた。君主の神格化は当時の人々にそのように意識されていたか否かとは無關係に、前者に属する宗教現象である。

このような問題を扱う場合には、しばしば方法論的混乱があるように見える。例えば、古代の王たちが自分を本心から神と考へたのか、或は政治上の手段として神を詐称したか、と云う疑問がそれであつて、ここに云われる「神」や

「王」とは現在の我々の觀念によつて考えられていることが多い。現在の観点からは、それは当然權力維持のための方策であつた、と評価すべきであり、當時に於いては、それが何故可能であつたかと云う諸条件を第一に問題とすべきで、王が意識的に神であつたのか否か、と云う問題は副次的である。たとえ意識的であつたとしても、そのような意識を規定する意識者の社会的な在り方をまず問題とすべきで、それが抜けている上記の疑問は、現在の観点で、當時の一人の人間に問いかけているのであり、伝記的な興味にすぎない。歴史の研究にとつては、意識的に神格化を承認した者も、本心から信じた者も、共に存在したところの當時の社会に内在した諸条件が重要である。こうすることによつて、現在の観点に立つて、當時の歴史の一側面（宗教の權力維持の手段としての側面）を正しく評価出来るのに対して、伝記記者的発想は古今東西變ることのない人間心理の普遍性に行きつき、歴史の否定に至るであらう。

この観点からナバテア王国に例をとり、王の神格化を考察しよう。ナバテア人の社会については、原始共同体時代から古代王国の成立に至るまでの時期がヘレニスティク時代に當つたために、それを神話的でない資料で辿ることが出来る。王朝が神話的始祖で始まらないことは、後世の神学的な王統起源説を通さないで、王の神格化の現象を観察することであるので、研究にとつて有利である。これは結局、ナバテア人の社会が後進的であるために、この人々自身も記録手段を持つのが早く、又周囲の先進諸民族のすぐれた記録手段によつて報告されることが多かつたことから生ずる有利さであつて、王の神格化の問題をこのような方法で扱うことは文化人類学的な考え方と云えよう。しかし、文化人類学が現存の未開社会の觀察から始める場合に、当該文化の土着性と外来性との判別が常に問題となるように、ナバテア人の社会の當時に於ける後進性と云うことから、神格化の問題に対しては勿論、他の諸文化要素に対しても、先進諸民族の文化が作用を及ぼしていたことが充分考えられる。

ナバテア王の神格化について初めて十分な資料を使った論文を書いた Clermont-Ganneau は、その由来を説明して、ナバテア王 Aretas III (C. 87~62 B.C.) がプトレマイオス朝かセレウコス朝から輸入したものと考えた。⁽³⁾その後、ナバテア文化に対するエジプトやヘレニズムの文化の作用が若干の面で確認されて来たが、特に Dussaud 等によつて主張されたように、ナバテア王に関する碑文に見られる王の兄妹婚がプトレマイオス朝のそれと関係あるとれば、⁽⁴⁾王の神格化もその線で理解すべきものであろう。最近の Sourdel の著作でもこの両者は結びつけて考えられた。⁽⁵⁾ファラオ達の兄妹婚については、未だその存在が普遍的であつたか否かについて意見の対立があり、⁽⁶⁾実証的な証拠は必らずしも多くないようであるが、プトレマイオス家の兄妹婚の由来として、ファラオ時代の一般の慣習やオシリス・イシス神話、或は王の神的受胎説⁽⁷⁾を考えるのが普通であらう。従つて、もしナバテア王の神格化がエジプトから来たものとすれば、その根源をファラオ時代の王権に関する神学にまでさかのぼらなくてはならないが、実際問題としては、そうした系譜の辿れる直接的な資料は存在しない。エジプトとナバテア人の関係としては次のようなことが分つている。

プトレマイオス朝とトランスヨルダン諸部族の交流を示す初期の文書は Zenon 文庫であるが、⁽⁸⁾後述する年代から分るように、当時のナバテア人社会は未だ王を戴くに到つていなかった。その後、ナバテア人とエジプトとの間に交易や人の往来があつたことは、エジプトのナバテア人碑文⁽⁹⁾や隊商路の Negeb 地方を仲介とする発展等⁽¹⁰⁾によつて認められる。又、ナバテア人の文化の上にもエジプトの作用が看取される。即ち、Petra の最も優れた建築物として有名な霊廟 El-Khazneh の正面の彫刻には Domaszewski の研究の示すように Isis 神の図像が見られ、⁽¹¹⁾それ故 Dussaud はこの墓所をエジプト方面で活躍した大商人のものであり得ると考えた。⁽¹²⁾その他、碑文等にナバテアでの Isis 崇拜に若干の資料がある。⁽¹³⁾又、Starcky は 44 B.C. 又は 77 B.C. のものと考証された Tell esh-Shuqâfiyeh の碑文

は、⁽¹⁴⁾ エジプト文化とナバテア文化の關係を示す興味ある事實を伝えている。まず、ナバテア人の碑文は年を自分たちの王の統治年で記すことが多いが、この碑文は、プトレマイオスの統治年によつてゐる。次に、奉納されている女神 *Al-Uzzah* が '*Al-Kutba*' (*KTB*) と称されるので、*Strugnell* はこれをエジプトの *Scribe-God* である *Thot* 神との習合を示す、と主張した。それが本当とすれば、⁽¹⁵⁾ 王権に関する神話がエジプトからナバテアに輸入されたことも大いに考えられる。

古錢學上から見ると、*Dussaud* によれば、⁽¹⁶⁾ プトレマイオス朝型の銀貨とセレウコス朝型の青銅貨が共に発行されたが、貨幣価値は独自のシステムに依つた。セレウコス朝からの作用としては、ナバテア人の行政組織に見られる *stipitegos* 等の職名などあげられるが、内容は酋長のようなものであつたらしく、⁽¹⁷⁾ ましてセレウコス朝の王権に関する思想がナバテア人の間に流入したか否かについては何等確証がない。もしそれが起つたとしたら、例えば、ペルシア時代の考え方をセレウコス朝が継受したと云われる *Hvarenô* 君主権説のしるしが、*Petra* の王制に見られなくてはならないであらう。

総じて、西紀前一世紀後半の *Petra* には、*Strabo* が記した通り、様々な異邦人がいた⁽¹⁸⁾ (*XVI, 4, 21*) が、これは同世紀前半のナバテア人自身による *Gaza* 方面及び *Haurân* 方面への進出とパルチア人、ローマ人の勢力の拡大の結果に他ならない。そして、この間に成立したと思われるナバテア人の君主崇拜の由来を異邦に求めるならば、際限もないことになる。その上、上記の通りヘレニズム両王朝の王権が基礎とした高度な神學をナバテア王達が利用したと云う具体的な証拠は乏しい。それに対して、ナバテア人の碑文や後世の文献資料は、この点についてむしろ、そのようなものの形成される以前の過程を示すように見える。一般に、そう云う過程の反映物が恐らく王権についての神話なので

あろう。そして、もし外国の考え方が流入し採用されたとしたら、それは神話形成の段階で行われたのであろうから、それ以前の過程が明らかになれば、どこから来た文化がその点について採用されるべきであつたかが分るであろう。

二、ナバテア王統史の社会的背景

ナバテア王の神格化が起つた時代（西紀前一世紀）に、王の地位・權威がナバテア人の間で如何なるものであつたかが分れば、神としての王の意味も正確にされよう。

ナバテア人の支配者の名前が最初に知られるのは、西紀前一六九年であつて、旧約聖書マッカベイ書（II, 5, 8）に「アラビア人たちの王 Aretas」と出る。この Aretas がナバテア人の支配者であつたことについては、すべての研究者が一致するが、「王」は原文では「tyrannos」となつており、「藩王」「酋長」等の訳語の方がふさわしいと云うことは既に指摘しておいた。⁽²⁰⁾ 即ち、当時のナバテア人社会の状態から考えて、古代国家と呼び得るものが存在したか否か疑わしい。それ以前に於けるナバテア人の存在は、旧約聖書やアシリアの文書に現われる Nebayot, Nabaiate 等についての複雑な論議は別として、ヘレニスティクの時代初期に Petra に於いて初めて確認されるが、そこでは、しばしば旧約聖書のレカブ人の生活（エレミヤ記、三五、六一—一〇）と比較されるように、農耕を営まず、酒を飲まず、家を建てず、荒野を祖国とし、共同体の自由を保持した（312 B.C.: Diod. Sic. XIX, 94, 2-4）。⁽²³⁾ そして、部族員の一人一人がこの掟を守ることとこの社会が支配をうけず搾取されないことが同一視された。この掟に背くことは私有財産制に向うことであり、それが社会の結束を破壊するから、違反に対して死刑が課されたが、では違反に対して必らずしも死刑が行われなくなつたと考えられる事実が知られるのはいつからであらうか。P. Scott は上記の Diodorus の報告

の年代(312 B. C.)の少しあとから家がたてられはじめたと主張するが、⁽²⁴⁾このような問題で正確な年を求めることは無理であつて、JosephusによつてPetraに王宮が存在したことの知られるAretas IIIの治世(Ant., XIV, 1, 16)の頃までにかなり一般の家も建ちはじめた、と考えるのがよい。農耕については、最近のNegeb地方の発掘の結果でも見解が対立しているが、ナバテア人の天才的な農業技術を信ずるGlueckでさえ、西紀前二世紀以後の四〇〇年間で最盛期とするのに対して、Mayersonはナバテア人の農耕は結局、辺地の零細な規模を出ず、最盛期もビザンチン時代であつた、と考えた。⁽²⁵⁾いずれにせよ、西紀前一世紀後半、Aretas IVやObodas IIIの時代には、Straboが書いた通り(XVI, 4, 26)、Petraの生活は定住民のそれに変わり、石造の家があり、農作物もとれ、飲酒も行われた。又、原始的共同体の生活の破壊を示す貨幣制度については、多くの学者(Dussaud, Rostovtzeff, Head, de Morgan等)⁽²⁶⁾がAretas IIIのもの(前出)が最初であると認めた。⁽²⁷⁾それ故、ナバテア人の社会の変質が起つた時代として、当然西紀前一世紀前半のAretas IIIに至る数十年間に注目すべきであり、上記のように“tyrannos”と呼ばれる初期の「王」は酋長の如き存在であつたと云える。J. RegnerはObodas I (96-90 B. C.)をも、古代国家の「王」と云うより、「族長」(phylarches)と呼んだ方がいいと考え、更にナバテア王統の部族社会的性格を強調して、確立した王位継承法は存在せず、むしろ族長の家父長的支配形態が濃かつたとする。⁽²⁸⁾Cantineauも、ナバテア王国の経済的基盤は沃地の灌漑農耕にはなかつたので、オリエント的専制政治にならなかつた、と考えた。⁽²⁹⁾西紀前一世紀後半のPetraの政治生活が示すように、急激に発展した後進社会として、ナバテア王国の制度は原始共同体時代の遺制を多く含んだことは興味ある点で、例えば、王権は公的にかなり限定され、王は部族員に行政の報告を義務づけられ、生活を時に査察され、家内奴隷をさえ殆んど持たない、と云う状態であつた(Str., XVI, 4, 21; 24)。この点でプトレマイオス朝やセレウコ

ス朝のように、文明社会の伝統の上に接木された王権と、ナバテア人のそれは非常に違っていた。従つて、王の神格化も、一方は既成の神学の政治的継受⁽³⁰⁾であつたのに対し、他方は同じ社会の共同体時代からの信仰の連続的發展の中から現われたと云う面が著しい。もし、古い時代の遺制が王権の周囲に根強く残存したのに、外国の思想によつて政治生活の全般にかかわる変更を行うなら、王権に対する抵抗が厳しいものとなる。しかし、それとは逆に、当時のナバテア王国は「極めてよく治められている」(Str., XVI, 4, 21: sphódra eunomeítai)と報告された。即ち、王の神格化が部族的な体制と何らかの形で妥協しながら行われたことが分る。前節で述べた神話形成以前の過程とはこのような様相を指すのである。

それ故、ナバテア王の神格化をそのようなものとして、又時代的には西紀前一世紀前半からのものとして、具体的な資料の検討に移ろう。

三、資料及びその解釈——その一・文書

(イ) Uranius の「アラビア誌」(ta arabica)

この作者及び著書については、主たる引用者である西紀後六世紀の地理辞典編纂者 Stephanus Byzantinus の“Ethnika”⁽³¹⁾から知られる。Uranius 自身に関しては、断片中に Konstantīna Nikephorion⁽³²⁾が⁽³³⁾出るので Constantinus 帝より後に属する人物であることは確かで、一説によると、Justinianus 帝 (A. D. 527~565) の時代のシリア人で哲学・神学に通じていた Uranius と同一人物とされる⁽³³⁾。その他の経歴等は全く不明であるが、Stephanus は特に「こうした事柄についての信用するに足る人」⁽³⁴⁾と評価した。しかし、近代の地理学的研究によると、これ等のごく謹か

の断片の中にさえ、かなりの誤りが認められると云う⁽³⁵⁾。この不正確さの原因が原作者にあるか、引用者にあるかは容易に決定出来ないであろうが、単なるごろあわせ的な地名説明ではなく、何等かの土着の伝承を伝えるものであることは、後出の Anara なる地名の説明を読んでも感じられる。F. Hommel の研究によると、Uranus の資料は西紀後三世紀末の Dionysius と云う “periēgetai” (旅行案内記作者) の一人が書いた六脚韻文である可能性⁽³⁶⁾があるが、一方ナバテア人の女神 Allāt は Herodotus (III, 8) 以来 Aphrodite-Urania として呼ばれたので、碑文等⁽³⁷⁾によつて知られるこの神にちなむ人名 “Uranios” とすると、この作者はアラビア系の人で、当地について直接的な見聞を持っていた可能性もある。いずれにせよ、近代の研究者の多くの者 (Baethgen, Clermont-Ganneau, Mordtmann, Regner 等⁽³⁸⁾) が、Obodas 王と地名 Eboda との関係を最もよく説明するものとして、Uranus の次の記事の重要性を認める。

「オボダ (Oboda)、それはウーラニオスの「アラビア誌」第四巻にあるナバテア人の一地域 (chorion) であつて、そこには彼等が神とするところの王オボデース (Obodes) が葬られている⁽³⁹⁾。」

ここにはナバテア人の王 Obodas のうち一人の者が神と看做され、その名に因む町に墓所があつたと云うのであるが、ナバテア王統史上知られる三人の Obodas 王のどれにあてはまるのか、その点の解明が神格化の性格とも関連して重大なのである。

(ロ) Eusebius の「コンスタンチヌス帝の栄光に関する即位30周年記念講話」

西紀後三三六年の作であつて、この中に神としての Obodas が言及される。即ち、ナバテア人の主神 Dusares と並んで、Obodas が挙げられるが、文脈から云つて、人間や動物や自然現象を神として崇拝する諸国の例の中に含まれる。従つて、この Obodas 神は、たとえナバテア王であると書かれていなくても、人間の神格化したものと考えられた

のである。

「…それ故、彼等はあらゆる種類 (genus) の最も醜いけものや、様々な種類 (species) の愚かな動物や、有毒でさえある蛇や、どうもうな野獸たちを神と呼んで疑わない。同じく、フェニキア人はメルカタロスとウソロスの他に、かつては人間であつたいやしいもの共を神と称した。かくして、アラビア人たちはドゥーサレスとオボダス (Doúsarin tina kai Obdon) を、ゲタエ人はザルモクシスをキリキア人はモブスを、テバイ人はアムフィアレオスを神とするが、どれも人間に共通な性質から区別されないものであるのみか、現実には全く人間である⁽⁴⁰⁾。」

(く) Tertullianus の護教書 “Ad nationes”

これは西紀後一九七 (或は一九八) 年に、より大部な “Apologeticus adversus gentes” と前後して書かれた⁽⁴¹⁾。後者には、アラビア人 (即ち、ナバテア人) の神として Dusares のみ挙げられるのに対して⁽⁴²⁾、前者には、Eusebius と同じく Dusares と Obodas の二柱が現われる。de Labriolle は ^{de} “Ad nationes” の方が後から書かれたとは云え、Obodas 神がつけ加えられた理由は何であろうか。文脈によつて “Apologeticus” の方は各属州・各都市でそれぞれ独自の神が拝されることを強調し、“Ad nationes” の方は Varro を引用して、更に多くの神名を挙げ、それ等が現実に見聞きされる神であつた、と云う。但し、百数十年後の Eusebius の上記の文章と比較すると、ナバテア人の神々と共に枚挙される神名が互にくい違つたので、二人の著者の用いた資料は別々である。

「多くの人々がシリア人のアタルガティス、アフリカ人のコレスティス、マウル人のヴァルスーティア、アラビア人のオボダスとドゥーサレス (Obodan et Dusares Arabum) ノーリクム人のベレーヌス、或はヴァローが述べているカシヌムの人々のデルヴェンティヌス、ナルニアの人々のヴィシディアヌス、アテネの人々のヌメンティス…を目で

見、耳で聞くことによつて知つたのではなかつたか。これ等の神名の品性は人間の名前とちがわない。⁽⁴³⁾」

(二) Ptolemaeus の地理書

以上は神としての Obodas 存在を示す資料であるが、次は地名としての Obodas を確認しよう。

Ptolemaeus は西紀後二世紀に属するが、その地名表 (V, 16, 4) 及び地図に Eboda なる土地が記されており、⁽⁴⁴⁾現在の 'Abdeh (或は 'Abdah) の位置を占める。

(ホ) Hierocles の旅行案内書

これは "fellow-traveller" を意味する "Synékdemos" と云う案内時で、⁽⁴⁵⁾上記 Stephanus の "Ethnika" とは同じく、Justinianus 帝の時代に編まれたらしい。⁽⁴⁶⁾それによると、ビザンチン時代の Negeb 地方の都市として、Zoara, Arindela, Aela, Mamopsora の他に Augustopolis が出て来るが、⁽⁴⁶⁾A. H. M. Jones はその意味から Uranius に出る Oboda を指すと考えた。

(ハ) Peutinger の地図 (Tabula Peutingeriana)

これは一三世紀の Augusburg の政治家・人文主義者であつた Konrad Peutinger 所有の地図で一二六五年に出版された。西紀後三世紀中頃或は同四世紀にさかのぼると考えられる古代ローマの旅行地図 (itineraria picta) で、そこに Negeb 地方の都市名として Eboda, Ad Dianam (Ain Ghadyan), Haila (Aila) がのびつる。

以上は、文献に現われた Obodas 王神格化の資料であるが、これ等により、第一に、ナバテア人の間に Obodas なる神がいた、第二に、その土地に同名の都邑があり、第三に Uranius によつて、この Obodas 神は王 Obodas の "apotheosis" である、と云うことが判明する。即ち、これ等の資料の内容の正確なことを承認するならば、Eusebius

や Tertullianus が Obodas 神を諸国の神々と同列に扱い、ビザンチン時代にまで Obodas 市が名を留めたことは、当地が Obodas 王の下にあるナバテア人の活動と密接な関係にあつたことを想像させる。

四、資料及びその解釈——その二、碑文・遺物

しかし、一九世紀末からこの問題に関する考古学的証拠が十分知られるまでは、右の資料もそのまゝ受けとられることがなく、Obodas なる神名に対して etymological な見地から様々な説明が提出されていた。その一人 G. Röscher⁽⁴⁷⁾ は一八八四年に、Obodas は Abdallah の縮小形であつて、そのために Allah との混同が起り、誤つて神とされた、と云う説を唱えた。しかし、考古学の進歩がこうした etymological な研究を越えて、新しい事実を知らせることになった。

(イ) “noms théophores”

Clermont-Ganneau は既に一八八〇年代の後半に、ナバテア人の碑文に見出される ‘Abd-haritat, ‘Abd-obodat などの “noms théophores” に着目し、これは王の神格化を示すものであり、Uranus の記事は実証された、と主張し、Nöldeke や de Vogüé がそれに従つた。⁽⁴⁸⁾

古来シリアやフェニキアの人々の名前には ‘Abd- (BD = servant, slave) を語頭に持つものが知られた。これは神名つきの人名 (noms théophores) の一種で、‘Abd- の次には神名が来て、その神のしもべなることを表わす。例えば、Tyrus, Sidon, Ascalon 等の碑文には、女神 ‘Astarte の奴隷を意味する人名として ‘Abd-‘astarte が出るし、Cyprus, Carthago 等の碑文からは Tyrus の Ba‘al 神でもある Melkart の奴隷を意味する ‘Abd-melkart や、同様

に Moloch 神⁽⁴⁹⁾ Hadad 神に由来する 'Abd-milkōn, 'Abd-hadad 等々が知られる。ナバテア王国内に於いても、Abdalgas (= 'Abd-al-gā' = servant of the god Gā⁽⁵⁰⁾), Abdallas, 'Abd-allāt, 'Abdabalou, Abdadousaras (= 'Abddūsharah), 'Abd-manōto⁽⁵¹⁾ 等が多数確認される。

この形の人名について、Baethgen は古代セム人の神観から生ずる命名法であり、例えば、シリアの大神 Ba'al⁽⁵⁴⁾ は普通名詞として所有主(特に土地)の意味し、民衆はその財産と共に神から貸し与えられた存在である、と云う思想を表わすと考えた。⁽⁵⁵⁾ この思想は神のみがその忠実なしもべとしての人間に恵みを与え、五穀を实らせると云うことを含むので、神と人との関係は Despot と奴隷、親と子の関係と看做される。この点で、Sourdel も同様に、Haurān 地方の神の副称 Kyrios (＝支配者) は、信者に対する神の絶対的優越を示すもので、'Abd- 形の人名はこうした宗教心の表われであると記した。⁽⁵⁶⁾ アラビア古代史でも Dū は所有者、支配者も意味し、Dūsarēs のような神名ばかりでなく、王が前二世紀以来のサバ王国のように、支配者としてこの語を用いた。⁽⁵⁷⁾ ナバテア王の場合、Haurān 地方でも Hegra-Medain Saleh⁽⁵⁸⁾ でも、「主人」(MR'N)と云う言葉で碑文に記されるが、そのような存在として王が考えられたことは、王権が確立し、王の所有権が神的なものとして社会的に保証された状態を意味する。従つて、その時期は既に述べたように、西紀前一世紀前半であつた可能性が大きい。既ち、'Abd- 形のナバテア王名による人名は、この段階の王権を反映する。

又、Clermont-Ganneau は上記の箇所⁽⁶⁰⁾で、'Abd-malikōn, 'Abd'obodat, 'Abd-haritat, 'Abd-rabbēl を挙げており、既知のナバテア王名のすべてが含まれる。その後考古学的調査により、实例は増大する一方で、一九一〇年代に行われたプリンストン大学のシリア遠征の際にも、ナバテア、ギリシア両語による多数の例が追加された。⁽⁶¹⁾ Littmann

によると、'Abd-ʿobodat などは当時既に数十例に達した⁽⁶²⁾。これ等がすべて王名つき人名であると断定出来るとは云えないが、'Abd- が語頭につく場合は、王の主人的性格から推して、君主名が言及されていることは、大多数の研究者が疑わない。

以上によつて分ることは、第一にこの種の人名の全ナバテア的流行は王の支配権確立の反映であり、第二に既知のすべての王名について行われたので、すべての王が神格化と関係あり、王個人個人の偉大な業績が神のそれに等しいと認めるに価したと云うよりも、権力の主体として王統或は王家の血筋が神聖視された、と云う二点である。しかし、この資料以外の示すところでは、すべてのナバテア王のうち、Obodas と云う一王だけが特に著しく神として崇拜され、その名に因む都邑まで在存したのはなぜであろうか。ここに浮かび上る王 Obodas と云う個人の持つ意味は何であろうか。

(ロ) 神 Obodas の像

一八九七年に初めて神としての Obodas 王を記した、より直接的な証拠が見出された。即ち、その年に Petra の南東方、有名な谷間の道 (Silk) の東側の入口にある El-mér の地下聖所から M. le pasteur Ehni と云う素人によつて発見された碑文がそれで、Melchior de Vogüé による報告、Clermont-Ganneau による解説が Journal asiatique 誌上にのつた⁽⁶⁴⁾。しかし、発見された場所の状況や碑文の模写について疑問が残つたので、翌年 Lagrange と Vincent が Petra に赴き、帰途土賊に襲われアラビア人従者二人が死亡する等の冒雄の後、正しい知識をもたらし、再び de Vogüé がそれを発表した⁽⁶⁵⁾。その後、この碑文のテキストは CIS, Cantineau, G. A. Cooke 等によつて採用され、ラテン語訳、現代語訳を付された⁽⁶⁶⁾。

ナバテア王オボダスの神格化について

「これは神 'Obodath の像であり、Patmon (or Peṭ-Ammon)⁽⁶⁷⁾ の子 Hōfaiṣhu の子である Honainu 一門……^(a) が建立した。(二行目) Withra の子 Teluk⁽⁶⁸⁾ 彼等の祖先 Patmon の Tshwṭh⁽⁶⁹⁾ にまします Hōfaiṣhu の神に。人民を愛するナバテア王 Haretat とその (三行目) 妹でナバテア人の女王である Suqnailat⁽⁷⁰⁾ 及び王の息子達の Malkou, 'Obodat, Rabel, Phasael, Sa'udat, Hagiru⁽⁷¹⁾ 及び王の孫である Hagiru の子 Haretat のすこやかならんことを。(四行目)……人民を愛するナバテア人の王 Haretat の治世第二九年 (A. D. 20) ……月。王に平安あれ。」

一八九七年の報告で、de Vogüé は第一行目の 'BDT'LH' を 'Obodatallah と一語に読み、その解釈を Clermont-Ganneau に任せたが、後者はそれを二語に切り、'BDTh 'LH' ('Obodath 'allah') と読んだ。この読み方の根拠として、'BDT'LH' なる人名はナバテア人の間に知ることが出来ないし、当時 Palmyra 出土の碑文に知られていたローマ皇帝 Hadrianus の神格化⁽⁷²⁾を示す HDRYNWŠ 'LH, theōs Adrianós と同じ語法であることを指摘し、単なる Allah 神のしもべを表わす神名つき人名とも違うと云う結論に到達した。そして、碑文の文脈から、この奉納の目的が民間の clan による王家の福祉の祈願であること、奉納場所の状況が墓地ではなく、何かの礼拝堂を思わせること等の点から、神格化された王 Obodas を祭った神社があった、と主張したが、翌一八九八年の確認以来、この主張の正しさはますます明白になった。⁽⁷³⁾

しかし、最も重大な問題は、ここで神とされる Obodas 王を王統史のどこに位置づけられるかである。

ナバテア王統史上、この名前と呼ばれる王は三人あり、⁽⁷⁴⁾すべて Aretas IV (9 B. C.—A. D. 20) より前に属するもので、年代上どの Obodas もがこの碑文の神格化された王であり得る。まず、Obodas I (96-90 B. C.) は西紀前一世紀前半のナバテア王国興隆期の王の一人で、亡び行くプトレマイオス・セレウコス両朝、ローマの東方進出、侵略的なマ

カベッス朝に対抗して、ナバテア人が自分の国を確立させる時の中心人物であつた。即ち、まず Aretas II (110~96 B. C.)⁽⁷⁵⁾ が西紀前九八年に Gaza をめぐつてユダヤ王 Alexander Jannaeus (104~78 B. C.) とはらあひたと云ふ記録 (Josephus, Ant., XIII, xiii, 3) があり、次の Obodas I がこのユダヤ王に Gadara 附近で大勝利、Moab, Negeb 両地方のユダヤ勢力 (Ibid., BJ, I, 87 ff.—Alexander は治世のはじめに Gaza, Gadara, Raphia, Amathus, Anthedon 等を掠奪) を決定的に失わせた (90 B. C.: Josephus, BJ, I, 90; Ant., XII, xiii, 5f.)⁽⁷⁶⁾。次いで、Rabbel I⁽⁷⁷⁾ はユダヤを経て南進して来たセリュコス朝最後の王の一人 Antiochus X (94-83 B. C.) の軍勢を Cana の村で全滅させ、この王をも殺した (Ibid., XIII, xv, i; BJ, I, 99~102)。これによつて北方進出の道が開かれ、次の王 Aretas III⁽⁷⁸⁾ は Chalcis のイトゥーレア人の王朝と Damascus 市民との紛争に介入して、この市を占領した (85 B. C.: Josephus, Ant., XIII, xv, 2; BJ, I, 113)。それと同時に Jerusalem を包囲して、ユダヤ王を窮地に陥らせた。

以上の諸王の連続的な成功を見る時、それは当時のレヴァント世界にとつて大きな驚異であつたにちがいない。ヘレニズム王朝を没落させ、狂信的なマカベッス朝の侵略を押し戻し、新興イトゥーレア王朝を内陸シリアの中心都市 Damascus から追い払つた、このナバテア王朝の業績の完成者は Aretas III であつたろう。しかし、この王から見れば、王国の基礎を置いてくれたのは、多分父の Obodas I と考えられたろう。何故なら、この人物は Gaza の入手によつて、Negeb 地方とそこを通過つてエジプト・地中海岸に至る交易路を確立し、交易による富の蓄積を経済的基盤とする王朝に偉大な恩恵を与えたからである。又、北方進出もこの王のマカベッス朝に対する勝利に発していることは明らかである。Petra のローマ時代の神殿の近くで発見された碑文及び像の台石は西紀前七一年⁽⁷⁹⁾ (又は六九年) に Aretas III が Obodas I に像を奉納したことを教える。この奉納は後者の事業を讃えたものであつたろう。

そう云う訳で、Obodas I はナバテア王のうちで特に崇拜されるべき理由を持ち、特に Negeb 地方の 'Abdeh と結びつく人としては、その地方の平定者であつたから、最もふさわしい。とは云え、同王の Negeb 地方での具体的な事蹟に関する資料は非常に少い。どの Obodas がこの碑文のそれであるのかを敢えて決定しない、A. H. M. Jones⁽⁸⁸⁾ は、Eboda-'Abdeh の由来を Alexander 大王やその後継者達の都市化政策に求め、西紀前三世紀のギリシア系小王朝を通じて、その後に興つた原住民の王期がそれを学んだ結果、例えば、コマゲネ王国の Samos 王 (C. 245 B. C.) による Samosata 創設やイトゥーレ⁽⁸⁹⁾王朝の Mennaeus が Gerha を Chalcis としたこと等が起つた、従つて、Eboda も又 Obodas 王の都市化政策の現われである、と考えた。ナバテア王の都市化政策に言及した資料としては、Uranus の Anara なる土地の由来記だけであつて、そこには Obodas 王とその息子 Aretas に関する一伝承が読まれる。その概要は、Aretas が父王に関する神託に従い、白衣の幽霊 (ephānē) に導かれて、白い道に沿つて進むうちに、幽霊が消えると同時に岩山が現われ、大地に木が生じたが、それがこの場所であると云う。⁽⁸⁹⁾ Anara とはアラビア語の ha-aurā のこと⁽⁹⁰⁾で、白 (gr. leukē) を意味するが、A. Musil の研究では、これは紅海沿岸のナバテア人の港 Leukē-kōmē⁽⁹¹⁾ではなく、Aqaba 湾と Petra の近くの隊商都市 Ma'an との間にある遺跡 al-Homeima であろうと云う。この資料の解釈はむづかしいが、「白」と云う言葉にまつわる因縁話としても、木が生ずると云う点は後述の生産力崇拜と結びつくし、王による若干の都邑創設の事実を反映しているであろう。しかし、都会的生活をつくり出すことを目的とするヘレニゼーションの政策とは別で、隊商貿易のための都市設置であつたろう。そうとすれば、この記事を Jones の説の裏づけとすることは出来ないとしても、Grohmann の云う通りにこの町が Obodas I の生時に息子 Aretas III によつて置かれたとすれば、⁽⁸⁴⁾他にも新しい町づくりが行われたことが想像される。又父子の関係にある Obodas-Aretas

の該当例としては、後出の Obodas III と Aretas IV より確実である。

次に、Obodas II については資料が乏しく、Cooke のようにその存在を疑い *interregnum* とする者もある⁽⁸⁵⁾。しかし、Clermont-Ganneau が Aretas III と Malichus I (C. 47-30 B. C.) の間の王統の *lacuna* をうめようとして、一方では長子相続と隔世的な人名のくり返しの事実に基づき、他方では上記碑文中の「人民を愛する」(*raḥem 'ammeh*)⁽⁸⁷⁾ を殊更に「曾祖父を愛する」⁽⁸⁸⁾と訳し、神 Obodat とは Aretas IV の曾祖父に当る王を指すと云う解釈により、Obodas II の存在を仮定した。それ以来 Clermont-Ganneau の挙げる上記の理由はそれぞれ疑われながらも、Obodas II の存在は認める傾向が支配的である。とにかく、碑文によつても確実な古銭によつても裏づけ得ない上、この王の統治期間中と見られる西紀前五五年に、ナバテア軍がローマのシリア総督 Gabinius によつて敗北させられた (Josephus, *Ant.*, XIV, vi, 4; BJ, I, 178)。Mommensen はこれによつて、ナバテア王国がローマへの従属度を強めたと解釈する⁽⁸⁹⁾。凡人の王は血統にすがつてのみ神であり得る。

第三の Obodas は、多くの研究者によつて神 Obodas 当人であろうと考えられて来た。例えば、Regner, Cantineau, Sourdel 等がそう考えるのに対し、Obodas I 説を採用する者は Gutschmid, CIS 等比較的少数である。Obodas III 説の根拠は端的にこの王が Aretas IV の前任者であつたから、と云ふことであるように思われるが、その一、Regner の考えは次の通りである。Aretas IV は王位につく前の名が Aineias であつた (Joseph, *Ant.*, XVI, ix, 4) ことで分るように、Obodas III の長子ではない。この非正統的な立場を補強するため、前任者 Obodas III を神格化することによつて、それを王家の新しい分枝 (*Königszweig*) の守護者としたのである。この説は、アラビア人が特に血縁を重要視し、⁽⁹¹⁾既に言及したように、ナバテア人の間に族長時代的な家父長制や長子相続法⁽⁹²⁾が残つていたと思われる

るので、無視することは出来ないが、この Aretas-Aineias の身分そのものについて確固とした証明がない。Josephus は Aineias の登位前の身分に関して明言していない⁽⁶⁴⁾、この名前の素性も不可解であり、本名とは思えない。Obodas III の時代に、Leuke-kômē の南方には「Obodas III 王の同胞である Aretas の領土」(Str., XVI, 4, 24: eis tēn Arēta gēn, syngenous to Obōda)があつたが、この Aretas を次の王と考え、ことも可能であり、Head, Clermont-Ganneau, Dussaud⁽⁶⁴⁾のように兄弟の關係にあるとしてもよく、Regner のように Aretas IV をより血のつながりの薄い僭称者と考えることも、或は Mommsen⁽⁶⁵⁾のように両者は父子の關係にあるとすることさえ可能であろう。このような困難が存在している上、更に Regner 説では十分説明出来ない点がある。例えば、Negeb 地方の Eboda 市と Obodas III の關係が説明出来るか、上記の王名つき人名の普遍的存在が唯一度の王位継承の事情から由来するとは不可解ではないか、加うるに Obodas III は病弱で、奸臣に、毒殺される等、業績上でも偉大であるとは云えない (Joseph., Ant., XVI, viii, 6; ix, 3; x, 8; cf., Str., XVI, 4, 24) 等の疑問が生ずる。

それ故、神 Obodas とは王国拡大の中心人物としての王家の偉大な祖先 Obodas I を指し、王たちの神名化（人名中の）はその血統の支配力を反映するもの、と考えるならば、最も合理的であろう。そうとすれば、このような形の神格化の説明として、エジプトの血統神聖視やヘレニズム風の英雄崇拜がナバテア王によつて学びとられたと云う可能性が大いにあり得る。しかし、ナバテア王国は外国支配の中から独立を得たのではなく、原始共同体的な遺制を残しつつ、独自に発展したのであるから、もし何かを学んだとすれば、自国の宗教による自分の権力の神聖化が自分の統治に役立つ、と云う点であつたろう。従つて、最初に述べた通り、王自身のつもりからでなく、王が属する社会の宗教の王権に寄与し得た面から調べよう。

(ハ) 神 Obodas の講社

G. Dalman による Petra で発見された碑文——「神 Obodat の講社 (Marzeah: MRZH) に於ける Wakihel の子 Obaidô とその仲間の名の永からんことを」⁽⁹⁶⁾」

即ち Obaidô が主催する MRZH なる祭祀団体が神 Obodas の崇拜のために存在した。前出の碑文が clan による奉納なのに対し、これは clan から離れた個人の集りによる宗教行為のように見える。両者の崇拜形式の異差については不明瞭で資料を欠くが、前者は多分ナバテア社会の古い制度と結びついた tribal な宗教形態を示すのに対し、王家の神を祭るための Obaidô 等の個人の集りが後者で、序々に超 tribal なものが宗教現象の中にも生じたことを暗示する。では、このような講組織で礼拝される対象は何であつたろうか。

MRZH の性格について特に研究した学者に Février がいる。⁽⁹⁷⁾ Février の集めた例によると、MRZH の分布は地理的には Palmyra, Petra, Elephantine, Massila, Peiraeus 等にわたり、人種的にはアラム人、フェニキア人、北アラビア人等北セム語族に属する。MRZH に関して最も多くの碑文を出す Palmyra では、その大多数が公共のもので、例えば、当市の主神 Bel の神社の神官房 (Collegia) が中心となり、大司祭 (archiereus) が MRZH の長 (rab-marzaha: symposiarchos) を兼ねた。そして、独自の基金を持ち、料理人・酌人・給仕人等の役職が置かれ、毎年一定の期日に講社員 (benê marzaha) が集い、祭祀を営んだ。MRZH とはこの種の年祭のための講社 (thiasos) であつた。西紀後一三二年の Palmyra の碑文の内容は、Aglibôl, Malakbel の二柱の神への MRZH による祭壇の奉納なので、その宗教活動の一端が知られるが、それは MRZH によらなくとも行い得る活動であり、酒宴をはると云うような “caractère alimentaire” にこそ MRZH の特性があつたろう。Strabo は Petra では、「一三人の集りで

一緒に共同食卓 (syssitia) を行う。それぞれの酒宴 (symposion) に、二人の歌女 (mousourgoi) がつく。王は大きな家⁽⁹⁹⁾で多くの酒宴を持つ。誰も一杯しか飲まないが、飲む度に異った金杯を用いる」(XVI, 4, 26) と記す。Clermont-Ganneau はこれを MRZH の描写と考えた。

では MRZH の “caractère alimentaire” と神 Obodas とはどうか。関係を持つのか。この点について Dussaud は MRZH を靈魂崇拜と結びつけ、次のように述べる。⁽¹⁰⁰⁾ 即ち、死者の靈 (nephesn) は原始信仰では “âme végétative” であつて、その墓前・祭所で生者達によつて饗応される必要があつた。ここから “caractère alimentaire” が由来する。人々は死者の靈のよりしろとして stelae を墓地に立て、その前で飲食し、死者を養つた。上記の “symposion” もこうした信仰の発展したもので、神 Obodas もこの方法で祭られた。上述の Petra の靈廟 El-Khazneh も “symposion” の場所であつた、と云うのである。靈魂崇拜のための “banquets funéraires” と神崇拜のための MRZH による “banquets rituels” とを区別する考え方もあるが、⁽¹⁰¹⁾ 旧約聖書のエゼキア記 (XVI, 5) の “beth marzeah” が「喪のある家」を意味する点から見ても、MRZH が死者の靈魂に対す祭祀として側面を持っていたことは確かである。それ故、Dussaud の云う通り、人々は神格化され Obodas 王のみたまを祭つて、その祭のために講社を結成したのであらう。

MRZH の起源は旧約聖書の事例が示すように血縁的祭祀であつた可能性があるが、Février によつて研究された碑文の MRZH は異国に生きる商人たちの集りや公共の祭祀であり、血縁的な色彩は薄い。即ち、tribal な共同体の段階を脱した古代王国の祭祀である。例えば、Palmyra でも Petra でも上述の如く飲酒が行われ、更に Petra では⁽¹⁰²⁾ Strabo 時代には「大きな家」でそれが催されたが、本来遊牧民は飲酒を嫌うもので、ヘレニスティク時代初期には既

に記した通り飲酒も家の建築もしなかつたのと全く対照的である。こうした MRZH の沃地的 (bacchique) な儀式は、遊牧民の tribal な共同体から私有財産制の古代国家への移行が沙漠的な生活形態から定住的なそれへの移行に対応した北セム語族の世界では、ナバテア人の定住地進出、王国確立、従つて、Negeb 地方開発の初期、Obodas I の時代にその発端を有すると云わなくてはならない。

古い信仰がこのような段階を経るにつれて、その表現様式を変貌させると云う事実を、ナバテア人の主要な定住地 Haurân に於ける “nephesh” 崇拜の記念物の変遷について、Enno Littmann が認めている。⁽¹⁰³⁾ その研究によると、遊牧民は上記のように死者の魂を粗石のまゝの stela に宿らせるが、定住化し、文化を知るにつれて、墓所として大きな建物を立て、Stela を壮厳する。そして、遂には “mnéméion” のような stela なしの記念堂に至ると云う。⁽¹⁰⁴⁾

以上の考察の示すところは、Obodas I が神聖な王統の確立者として、古い clan の枠を越えて、人民から崇拜されたことである。では、人々の心の中に神格化された王を巡つて、いかなる神学が意識されていたのか。

Clermont-Ganneau は上記の「神 Obodas の像」の碑文の一行目末の ⁽¹⁰⁵⁾lacuna の部分を推測して、Hotishu 家の神の礼拝と新たに導入された神 Obodas のそれとの結合が行われたとしたが、民間の clan が王家と云う一つの clan に対して上下の關係に置かれることが王国の成立の一現象であるとするれば、諸部族諸家系は、宗教上こう云う形で王の下に統一されたであろう。しかし、こうした習合を末代に至るまで可能にするには、王統の神聖さを単なる偉大な始祖の崇拜だけではなく、それ以上の何ものかによつて保証しなくてはならない。多くの王統は半神半人の始祖を越えて、その民族の主たる神々にまで接続する。これなしには王統の神聖の絶対的優越は考えられなかつたであろう。とすれば、ナバテア王統はどの神と結びつき、そのためにどのような神聖な力をその神から授つたのか。

ナバテア人の主神は Dushara (gr. Dūsārēs) で、この神自身ナバテア人の社会的発展にともない、遊牧民の太陽神から農耕民の沃地神へと長い歴史を辿った。Haurân 地方の Imtân の碑文⁽¹⁰⁶⁾ (A. D. 93) や Petra の碑文⁽¹⁰⁷⁾ (A. D. 1st. cent.) や Medain Saleh の三つの碑文⁽¹⁰⁸⁾ (A. D. 27?; A. D. 31; A. D. 39) では、Dūsārēs 神は「主君の神」或は「(王) Rabbēl の神」などの副称を持つ (DYSR' LH MR'N'; LH LBL')⁽¹⁰⁹⁾ Dussaud の指摘したように、これ等は Dūsārēs 神が王家の守護神であつた証拠である。即ち Dussaud, de Vogüé 等によると、これ等は “dieu d' un tel” の形の神称に属するもので、旧約聖書の族長の神と同様な神の呼び方が、ナバテア人の社会にも、多分遊牧時代からの慣習として存在し (Safidou の神、Qasiou の神、Mattanou の神、Hotaishu の神、Manbatô の神等)、Sifa の Bal Shamûn や Petra の Dūsārēs 等の地方的大神と同一視されたのである。「神 Obodas の像」の碑文中の「Hotaishu の神」(LH HTYSW) に h t y w de Vogüé は「君主の神」「Qasiou の神」と同形であると云つたが、結局「神格化された祖先」としたのに対し、G. A. Gooke はこれも Dūsārēs であろうと主張した。⁽¹¹⁰⁾ いずれにしても、上記のように Hotaishu 家が自分達の神と王家の神との結合を意図していたとすれば、Dūsārēs 神は王家の守護神としてそれにふさわしい普遍的絶対的支配力を要求し、民間の諸祭祀でもそのような強大な神を崇拜することになる。王権と Dūsārēs 神の関係が人々にどのように意識されていたかは、Petra の El-Madras の聖所の碑文⁽¹¹²⁾ (A. D. 12) に、王 Aretas のために Dūsārēs 神の像が建立された、とあることから想像し得よう。

では、王家が権力と宗教の力で支配し、人民はそれを恐れることによつて支配が行われたのであろうか。そのような単純な政治的権力関係で古代王国が成り立っていたのではなく、王は Dūsārēs 神と云う沃地の生育神 (vegetation god) と結びつくことによつて、人民の恩恵者として意識されるようになったであらう。なぜなら、定住民化したナバテ

ア人にとつてもオアシスのナバテア人にも、農作物をはじめとするあらゆる自然の恵みの支配者であつた *Dusares* 神が、権力者の血筋と結びつく⁽¹¹³⁾と信じ、代々の王を神として崇拜することは当然王の聖なる社会的機能——生育に關係する一切の現象、四季の順調な運行による豊年満作、自然の生産性——をも信ずることであり、後世から判断を下すならば、王は自分を神に等しい大いなる恩恵者とする人民の意識を、治世の安定のために利用していた。*Uranus* はこのよう⁽¹¹⁴⁾な王が現実にはいかなるものと意識されたかを暗示する、王のみたまの生育神的能力についての伝承を述べている。それによると、アラビアに聖なる葦の森があり、そこに王一族がミイラとして埋葬されるが、そこから植物が生育する、と云う。*Hommel* はこの伝承が *Herodotus* (III, 24) にあるエチオピア人の風習に似ていることを指摘し、神格化された王についての誤解された神話と看做すが、ナバテア人(或は一般セム人)とエチオピア人の間に見られる、“*nep-hesh*” 信仰や神域形態の類似は *Littmann* によつて早くから主張されており、*Herodotus* と *Uranus* との類似は驚くに当らない。むしろ、植物の生育と王の神性やその崇拜が結びつく点に注目すべきであろう。

次に、*Obodas I* の埋葬された *Negeb* の都邑 *Abdeh* からの証拠を概観しよう。

(二) *Abdeh* の発掘

Negeb 地方の風土は本来荒野で、農耕は灌漑によつてのみ行われる。⁽¹¹⁷⁾ここでは灌漑設備の一種として、ブドウ塚(*teleilat el-'hanab*) と呼ばれる石塚が使われたが、*Abdeh* でも二五〇〇ヘクタールにわたつて、⁽¹¹⁸⁾それが行われた。一帯には中期青銅器時代 (I: 2100-1900 B. C.) 以来かなりの人口があつたらしいが、⁽¹¹⁹⁾ビザンチン時代には、*Glueck* の推定によると、*Negeb* 地方の各都市に五、〇〇〇人から二〇、〇〇〇人が住み、*Abdeh* はその中でも一流であつた。⁽¹²⁰⁾この町は中央 *Negeb* 高地にあつて、*Petra* と地中海、エジプト、パレスチナ等を結ぶ交易路の結接点であつた。これ

等の路線は最近の N. Glueck の詳しい実地調査によつてよく分るようになった。⁽¹²¹⁾

‘Abdeh には現在ビザンチン時代の大修道院や要塞等の跡、それ等に付属する貯水槽、浴場その他の廃虚が残る。⁽¹²²⁾ ことがナバテア時代にも栄えたことは、その時代に属する土器片及びナバテア人の碑文が出土するので分る。現在までに、Obodas 王の崇拜と関係あると認められる遺制として次のようなものがある。

第一に、上記の修道院の下からナバテア時代の大神殿の跡が現われたが、発掘者等はその規模から考えて、ここで神 Obodas の礼拝が行われたであろうと推測した。又、それと同時代のものと考えられる多数の地下墓地があり、その中に二ヶ所の埋葬用凹所 (niches) のある大墓地があり、発掘者等はこれは Obodas 王自身の墓所であると主張した。⁽¹²⁴⁾ 碑文としては、岩面の graffito (A. D. 203) に「生ける Obodat」なる文字が見え、⁽¹²⁵⁾ 王の魂崇拜と関係があるろう。又、A. Musil は “Zeus Obodas” なる銘文を写したが、⁽¹²⁶⁾ これが Obodas 王と Zeus 神の同一視を示すものとすれば、後者は Ba'al-shamîn 或は Dusares、⁽¹²⁷⁾ 或はその両者の習合した神であり得る。

これ等の遺物をみると、例えば、Obodas の神殿・墓地と云われるものと碑文発見の位置とは場所的に結びつかないので、必らずしも決定的とは云えない。しかし、以上の出土資料と Ebode, Oboda, Augustopolis 等を記す文献資料とを考えあわせると、‘Abdeh は Obodas I の神格化と特に深い関係のある土地であることは疑い得ない。とりわけ、Ptolemaeus (西紀後二世紀) のような早期の文献は出土資料と時間的に接している。Cantineau は Moab 地方の町 Madaba の墓碑銘 (A. D. 37) 中の地名を ‘Obodtā (‘BDT’) と読み、これは ‘Abdeh に当ると主張する。⁽¹²⁸⁾ もし本当ならば、この碑文によつて当地に ‘Abd-‘obodat なる役人 (stratēgos) が滞在したことになり、この町名の最も古い年代での確認となるが、CIS や G. A. Cooke の読みは ‘Abarta (‘BRT’) であり、別の地点を意味する。⁽¹²⁹⁾

次に注目すべき資料は古銭で、ナバテア王 Malichus II⁽¹³¹⁾、ローマ皇帝 Nero の時代に、この町で鑄造された⁽¹³²⁾。当時ナバテア人はローマ軍の Jerusalem 攻撃に参加したので、ローマ人がここで鑄造したのであらう (cf. Josephus, BJ, III, 4, 2)。その古銭には EBW4H2 なる銘があり、Abdeh がナバテア王国の内部でかなり重要性を持った町であつて、同時に、当時から多くの外国人がここに来て、町の祭祀やその縁起をローマ世界に伝える役目をしていたことを推測させる。

以上が、ナバテア人を例としての古代国家に於ける王の神格化の由来、その機構の研究である。王権は絶対的權利とその永続性を望むものとして、血統について神聖化が行われることを欲する。従つて、王権はその神祕化が保証されるような上部構造が宗教の面でも形成されることを欲する。沃地的宗教はそのような要求に応じうる。民衆の祭祀や神觀念が tribal な結合力から解族され、支配者の祭祀や神觀念に吸収され、信仰は超 tribal な普遍的なものを志向し、「人民の世界観」ともなる。沃地化した宗教は支配者に奉仕し、支配者の世界を批判する宗教者は、形成された普遍化した諸宗教觀念を抱いたまゝ、部族員としてではなく、今度は個人として、沙漠や山岳に去り、疎外された宗教の回復を計るのである。

省 略

- 1) Baethgen=F. Baethgen, Beitrage zur semitischen Religionsgeschichte, 1888.
- 2) Cantineau=J. Cantineau, Le nabatéen, I (1930), II (1932).
- 3) Cooke=G. A. Cooke, A Text-book of North-Semitic Inscriptions, 1903.
- 4) Dussaud, Les Arabes=R. Dussaud, Les arabes en Syrie avant l'Islam, 1907.

- 5) Ibid, Pénétration=Ibid, La pénétration des arabes en Syrie avant l'Islam, 1955.
- 6) Février=J. G. Février, La religion des palmyréniens, 1931.
- 7) Glueck, Rivers=N. Glueck, Rivers in the Desert, A History of the Negeb, 1959.
- 8) Head=B. V. Head, Historia numorum, 1911.
- 9) Hommel=F. Hommel, Ethnographie und Geographie der alten Orients, Handbuch der Altertumswissenschaft, III, I, i, 1926.
- 10) Jones, Cities=A. H. M. Jones, Cities in the Eastern Roman Provinces, 1937.
- 11) Littmann, IS=E. Littmann, Publications of the Princeton University Archaeological Expeditions to Syria in 1904~1905 and 1909, Div. IV, Sect. A.
- 12) Ibid, IG=Ibid, Div. III, Sect. A.
- 13) Sourdel=D. Sourdel, Les cultes du Haurân à l'époque romaine, 1952.
- 14) Mommsen=Th. Mommsen, Roemische Geschichte, 1894.
- 15) Robinson=G. L. Robinson, The Sarcophagus of an Ancient Civilization; Petra, Edom and the Edomites, 1936.
- 16) Rostovtzeff, HH=M. I. Rostovtzeff, Social and Economic History of the Hellenistic World, 1953.
- 17) FHG=Mueller, Fragmenta historicorum graecorum.
- 18) CIS=Corpus Inscriptionum Semiticarum.
- 19) JA=Journal asiatique.
- 20) PWRE=Pauly-Wissowa-Kroll, Realencyclopaedie der Altertumswissenschaft.
- 21) BASOR=Bulletin of the American Schools of Oriental Research.

22) ZDMG=Zeitschrift der Deutschen Morgenlaendischen Gesellschaft.

註

- (1) この言葉の出所は、圭室諦成、日本文化史講座、新評論社(昭和30年)、第五巻、90頁。
- (2) ナバテア人は未だ王国建設の前の段階にあつた紀元前三一二年に、既にアラム文字による表現方法を取りいていた(Diod. Sic., XIX, 96, 1)。
- (3) La statue du dieu Obodas, roi de nabatène, JA, IX^e série, tome X, 1897, p. 520.
- (4) R. Dussaud, Numismatique des rois de nabatène, JA, X^e série, tome III, 1904, p. 204. Dussaudによれば、貨幣に王妃の像が打たれると云う事實は、王妃が王家の出であつて、生得権としてそのような名譽を持つたことを示し、王と王族外の女との結婚によつてその女が女王であつたのではない。
- (5) Sourdel, p. 113.
- (6) この点についての最近の学説の紹介は、富村伝、埃及王朝時代における兄妹婚の再検討、古代学、8の4、昭和35年、四〇一頁以下になつてゐる。
- (7) Cf. E. O. James, Myth and Ritual in the Ancient Near East, N. Y., 1958, pp. 82~85. プトレマイオス朝とパトラ時代の関係について、P. Jouguet, Macedonian Imperialism and the Hellenization of the East, pp. 286~297.
- (8) Cf., M. J. Rostovtzeff, Out of the Past of Greece and Rome, 1932, pp. 114f.
- (9) Cf., Rostovtzeff, HH, p. 1541.
- (10) Cf., Glueck, pp. 274f.; P. Jouguet, op. cit., p. 274.
- (11) この建物の十分な記述について、Robinson, pp. 61~71. ここにも述べられているが、当時これを Isis 神殿と考える者(例えば、H. S. Bliss, apud Robinson, p. 16) それに反対して、ナバテア人の大女神 Allāt の神殿と考える者(Rostovtzeff, Caravan Cities, 1932, p. 43) 等があつたが、Petra の最初の研究者 Burckhardt や、Palmer, Dalman 等によつて王或は有力者の靈廟であつたと云ふ説が確立した。Cf., Dussaud, Pénétration, p. 31.

ナバテア王オボダスの神格化について

- (2) Dussaud, *ibid.*, p. 34.
- (3) Cf., Sourdel, p. 91; Grohmann, *PWRE*, I, xvi, 1467. 又 Cantineau, II, p. 170 の神名表参照 ('YSY, 9').
- (4) J. Strugnell, *BASOR*, 156, 1959, pp. 34f.
- (5) W. F. Albright (*BASOR*, *ibid.*, p. 37) は上掲 Strugnell のレポートに註解を加えて、この 'Al-Kutba' はバシロニアの Scribe-God である Nabu の信仰と関係あると強調した。
- (6) Dussaud, *JA*, *op. cit.*, p. 189~238. 西紀前六五年に Aretas III が Damascus を占めたものはヤハントス朝の Demetrias 帝、以後西紀一〇一年までのものは銀貨であるといふ。後者は三五〇年頃まで drachmai syrai として流通したと云ふ。 Cf., Rostovtzeff, *HH*, p. 156, n. 35; Cantineau, I, p. 12.; Regner, *PWRE*, I, xviii, 1736.
- (7) Jones, *Cities*, p. 285.
- (8) F. Cumont, *The Mysteries of Mithra*, N. Y., 1956, p. 94f. 但し、都市では Hvarénô とは関係なく神格化が行われた (P. Jouguet, *op. cit.*, p. 360.)。ナバテアに於けるペルシアの宗教は、わずかの痕跡を有するのみで、南シリアの都市 Sī'a からミトラ教の記念物 (薄浮彫の Mithra tauroctonus) が見出され、そこにこの神の神殿があつたろうと推定されるが、時代は不明 (Sourdel, p. 96)。
- (9) Cantineau が碑文の言語を分析したところでは、ナバテア人の語彙にはギリシア語、アッカド語、ペルシア語、エジプト語、クプル語等が混入していた (II, p. 173)。
- (10) 「オリエント」5 の 1、一九六二、一二二頁註五。
- (11) Cf., Grohmann, *PWRE*, I, xvi, 1454f.; Dussaud, *Pénétration*, pp. 22f.
- (12) 関根正雄、イスラエル宗教文北史、岩波書店、昭和32年、95頁。Glueck, *Rivers*, p. 198.
- (13) 「史学」33 の 3・4、一七四頁以下参照。
- (14) Robinson, p. 378.
- (15) この対立については「史学」34 の 3・4、一七二頁以下参照。
- (16) Head, p. 811; Rostovtzeff, *HH*, p. 1536, n. 136; J. de Morgan, *Manuel de numismatique orientale de l'antiquité*

et du moyenage, tome 1, 1923, p. 253; Dussaud, JA, op. cit., p. 197.

- (62) Cf., Dussaud, JA, op. cit., p. 193f.; de Saulcy (文の Barclay, Travels in Arabia Deserta by Ch. Doughty, I, p. 229; Cf., Regner, op. cit., 1736) は Malichus の銘のある古銭の二つが、西紀前二世紀後半に属するものと見て Josephus (Ant., XIII, 131f: 145/144 B.C.) の Malichus と結びつけた。当時のナバテア王であったとするが、後者がナバテア人であったか否か疑われない (Grohmann, PWRE, I, xvi, 1459)。又、この王の存在を Dussaud は de Saulcy の古銭解説の誤だと歸し、G. A. Cooke, Littmann も無視し、一方 CIS (II, i, 2, p. 181) は認めて、"ex nummi solum notus" と記す。
- (63) Regner, op. cit., 1736; 1738. "Phylarchus" と縁する前掲のヘラシム族の「王」の例として、Emesa の Jambriehos である (Février, p. 19)。
- (64) Cantineau, I, p. 4.
- (65) 例えば、プトレマイオス朝において、金貨の最初は、ヒムトの宗教の採用は政策的なものであった。Cf., Jouguet, op. cit., p. 310.
- (66) 現在 Epitoma には残る。顯暦の年々 (A. D. 528~535) として、Honigmann, PWRE, II, iii, 2372f. の他 Tzetzes 等からの断片がすべて FHG, IV, 523~526 に収められた。
- (67) Edessa の近辺のもの、現在の Rakka—Constantinus 帝に因って改められた。FHG, IV, 526, frag. 28. に出る。
- (68) FHG, IV, 523.
- (69) Ibid., IV, 526, frag. 31.
- (70) Honigmann, op. cit., 2387. Cf., Domaszewski, Archiv für Religionswissenschaft, XI, S. 239~242.
- (71) Hommel, S. 521, Anm. 1. Dionysius の著述の二つは Eratosthenes (275~195 B.C.) によるものであるが、ナバテア王に関する記事が後者にも一つ書かれたという時間的に不可能である。Dionysius の著書 (Descriptio Orbis Terrarum) は西紀後六世紀初めに Constantinopolis で教えた文法学者 Priscianus 等によって使われた。
- (72) Littmann, IG, pp. 103f. p. 437; pp. 388f.; cf., Sourdel, p. 21.
- (73) Baethgen, S. 109; Clermont-Ganneau, loc. cit., p. 525; Mordtmann, ZDMG, XXIX, 1876, S. 103; Regner, PWRE,

I, xvii, 1773; CIS, II, i, 354, note...

(68) FHG, IV, 523, frag. 23.

(69) Oratio de laudibus Constantini in ejus tricennalibus habita, 645, A-B: Migne, Patrologia Graeca, XX, ii, 1400; Cf., Mordtmann, loc. cit., S. 103.

(70) ὁ πατριάρχης P. de Labriolle, History and Literature of Christianity from Tertullian to Boethius, London, 1924, p. 66.

(71) Migne, Patrologia Latina, I, 1, 418f. 「...個々それぞれの属州や都市が自分の神を持つ。例えば、シリアのアタルガティス、パルミラのゼン、パルミラのヘーリクスのペネウス、アフリカのカエレスティス、マウリタニアのレグリ等である。」(24)

(72) Ibid., 596, II, 8, A.

(73) Honigsmann, PWRE, II, iii, 2372; Kiessling, ibid., I, viii, 1487; Jones, Cities, Appendix III, pp. 502-509.

(74) Jones, ibid., p. 294. 聖キリスト教公會議の記録によれば Augustopolis は同教がった (ibid., p. 417, n. 91)。

(75) Glueck. Rivers, pp. 258; 271.

(76) ZDMG, XXXVIII, 1884, S. 644.

(77) Cf., Clermont-Ganneau, JA, IXe série, tome X, p. 520, n. 1; Littmann, IG, p. 253.

(78) Baethgen, S. 32-37.

(79) Littmann, IG, p. 59, No. 56; Cantineau, II, p. 9f. (A. D. 93); cf., Sourdel, p. 52.

(80) Littmann, IG, p. 55, No. 46; cf., Fébrier, p. 10; Sourdel, p. 72.

(81) Littmann, IG, p. 334, No. 723; M. A. Levy, ZDMG, XIV, 1860, S. 464, Nr. 117. (BD-DY-ShR—Sinai).

(82) Cantineau, II, p. 38.

(83) Ba'al はシリア人の神であるが、これがアラブ人の Dû に相当するものではすべての研究者が認める。ナバテア人の主神 Dû-sares の Petra 周辺の山地 Sharah の主 (Dû) はその Dû のな神像である。 Cf., J. Starcky, Syria, XXVI, 1949, p. 82, n. 5.

- (55) 但し、この思想自体はヘレスチナのヤム人だけではなく、古代のアナトリアにも、ギリシアにも存在した。Cf., Sir William Ramsay, *Asiatic Elements in Greek Civilization*, London, 1927, Chapt. IV.
- (56) Sourdel, p. 97f.
- (57) 前嶋信次教授、アラビア史、修道社、昭和33年、98頁参照。又、Dussaud, *Les Arabes*, p. 2f. サバ人にはDûのつく神も知らぬ(CIS, II, i, 2, p. 184: Dhu Samai)。
- (58) Cantineau, II, p. 21f. (X) Imtân 出十。「じね即ち Godayô の子 Mon'at が奉納した stela (MSGD)」とある。Bošrâ とは「我等の」主の神 Dûsarâ A'râ のため(奉ぐ)。ナバテア人の王にして、人民に命を与え、救い給う王 Rabbêl の築二三年(A. D. 93)」。Cf., Sourdel, p. 59; Grohmann, *PWRE*, I, xvi, 1466.
- (59) E. Renan, *Documents épigraphiques recueillis dans le nord de l'Arabie par M. Charles Doughty, Travels in Arabia Deserta*, London, 1936, Vol. I, Appendix, p. 225, No. 9 (A. D. 16); Cantineau, II, p. 33 (V).
- (60) 新書中の資料として、例として E. Sachau, *ZDMG*, XXXVIII, 1884, S. 539: 'Abdmalkhû od. 'Ebhedh-malkhû; E. Renan, op. cit., 'Abd-'obodat: p. 224, No. 2 (A. D. 2), No. 3 (A. D. 40), p. 225, No. 7 (3 B. C.), p. 226, No. 10 (A. D. 77).
- (61) Littmann, IS, p. 64, No. 82: 'Abd-'obodat=IG, p. 259, No. 569; IS, p. 40, No. 42; IG, p. 254, No. 569: Abdoobdou; IS, p. 70, No. 94: 'Abd-rabbêl. Cf., Baethgen, p. 169; Sourdel, p. 114.
- (62) Littmann, IS, p. 40.
- (63) じねは Malichus, Malkou (MLKW) とは名は、王族以外にも広く流布した。Palmyra でも多かつた(J. Starcky, *Palmyre*, 1952, p. 21)。Dura-Europos の例は、Dura-report, VII, p. 169, No. 689 (bilingual); Malkos=MLKW. 又、'Obodas とは名前の持主が必ずしも王一族の者とは限らないうちや Littmann が注意した(IS, p. 41: cf., p. 77)。
- (64) IX^e série, tome X, p. 200f., No. 354; p. 518f.
- (65) Ibid., tome XI, p. 132f.
- (66) CIS, II, i, 3, No. 354; Cantineau, I, p. 15, V=II, p. 5f., iv; G. A. Cooke, pp. 244~246.

- (67) この名前がエジプト系の神名 (Ammon) とき人名であるといふ説 (de Vogüé, Littmann, Cantineau) とそれを否定する説 (Cooke) がある。
- (68) 二行目最初の三語の読みは不安定で、前行末尾の脱落箇所 (a) のため意味もあいまいである。
- (69) TshWTh は解釈困難の語であつて、de Vogüé は訳すにすぎ、CIS は lararium (家の神を祭つてある場所) とし、G. A. Cooke は Clermont-Ganneau 説を支持して、「屋根」と訳し、Strabo (XVI, 4, 26) の記すところの、ナバテア人の屋上での祭祀を示すと考ええる。
- (70) De Vogüé によると、最後の文句 (「王に平安あれ」) は筆跡その他から推して碑文全体とは別の手になるもので、後の加筆と云ふ (JA, IX^e série, tome XI, p. 133)。
- (71) Palmyra の商人による碑文。Cf., Rostovtzeff, Caravan Cities, p. 144.; Cooke, p. 282.
- (72) 現在までに、ナバテア人の間に知られる Allah は唯一例 (Littmann, IS, 96) であるが、Sourdel の指摘するように、読みが正しいか否か疑わしい。しかし、Abdallas を初めとして、この神の “noms théophores” は多数みつかふ。Cf., Sourdel, p. 87f. 尚、本稿は昭和37年度日本西洋史学会で発表したものであるが、その際三笠宮殿下から、‘BDT’ の tāw は ‘BD’ の女性形を示すともとれるので、Abdallas に対応して、神名 Allah ときの名前を持った女性が ‘BDT’ であつたのではないかと、この御指摘があつた。確かに、ナバテア王国では女性の地位が比較的高く、ある碑文では家族の血統が女性の側から記された程であるが、この碑文の場合、全体の文脈から云うと、そのような女性の像が奉納された意味が理解しにくいように思われる。語法の上で他の碑文と比較してみると、まず西紀後二六七年の Medain Saleh の墓碑銘に ‘BDMNWJW’ MH (母 ‘Abd-manôto) が出る。この女性の名前は Manôto 神のしもべを意味するが、‘BD’ が使われて、‘BDT’ となつていない (Cantineau, II, p. 38, ix, l. 3)。次に ‘‘BDT’LH’ の像 (‘TSLM’ DY ‘BDT’LH’ (‘TSLM’ についで、別の例を捜すと、Haurân の一都国 Sifa の三語碑文 (Littmann, IS, pp. 81 ff., No. 103; Cantineau, II, p. 15, v.) に「これは (女神) Sheif の像」(D’ TSLMT’ DY SYW: キリシマ語部分は “Seeia kata gē Auraneitin hestēkuia”) とあり、像の主が女性であれば、Cantineau が主張するように、それを示すために ‘TSLMT’ なる女性形が用いられると考えられる。これ等の語法上の問題点には一般的な規則があつたかどうか疑問であるが、‘BDT’LH’ の解釈に何か寄与するのではないかと考えてこれ

等の例を挙げた次第である。

(63) 即ち、上記一八九七年の報告 (p. 131) で de Vogüé は Ehni の発見した場所が Clermont-Ganneau の考えた通り、墓地ではなく聖所であり、多分そこに存在した神像によつて一定の祭祀が営まれたことを認めた。

(7) Glueck (Rivers, p. 244) だけは四人の Obodas を認め、当該碑文の 'Obodat' が第三世か第四世であるが、その理由を知らずに出來た。

(8) ナブテア王の年代決定については、細部にわたつて見解の相違が存在する。筆者が参照した著書は次の通りである。Littmann, p. viii; Cantineau, p. 6~9; Head, p. 811; CIS, II, i, 2, p. 181; G. A. Cooke, art. Nabataeans, *Encyclopaedia of Religion and Ethics*, 1908, Vol. IX, p. 121, b; Hommel, S. 193, Ann. 1; Grohmann, PWRE, I, xvi, 1459; R. Dussaud, *Numismatique des rois de nabatène*, JA, Xe série, tome III, 1904, p. 189f. 等の他、A. Jausen et R. Savignac, *Revue biblique*, VIII, 1911, p. 273f.; R. Dussaud et F. Maclet, *Mission archéologique*, 1903, p. 69f; E. Schürer, *Geschichte der jüdischen Völker*, I, S. 728~; Gutschmid, in Euting, *Nabatäische Inschriften aus Arabien*, 1885, S. 81~; Kammerer, *Petra et la nabatène*, p. 17f, p. 514~522, p. 531~534. 等の文献がある。Aretas II のことでは、Littmann, Cantineau, Grohmann, Cooke 等が一致しているが、概して資料が不十分である。

(9) この年については Josephus の記述と困難がある。Regner (PWRE, I, xviii, 1736) は 95/94 B. C. Grohmann (PWRE, I, xvi, 1460) は 93 B. C. 又は 90 B. C. である。また、Obodas I の年代決定にも差が生じ、Littmann, Cantineau は 96~90 B. C., Cooke, Hill, Levy は C. 96 B. C., Dussaud は C. 90 B. C., Grohmann は 95~87 B. C. 又は 90~87 B. C., Regner は 96~87 B. C. である。

(10) Cf., FHG, IV, 525, frag. 24, art. Mōthō. 但し、この年代は疑わしい。Antigonus である。Cf., Regner, op. cit., 1735. 続前年では Littmann, Cantineau: 90-87 B. C.; Grohmann, Hill, Dussaud: C. 87 B. C.; Cooke: C. 86 B. C.

(11) Head, Littmann, Cantineau, Grohmann はそれぞれ 87-62 B. C., Cooke はそれぞれ 85-60 B. C.

(12) Grohmann, op. cit., 1460. 田中は Brünnow und Domaszewski, *Die Provincia Arabia*, 1904, Vol. I, S. 312~, Nr. 405.

(13) Greek City, 1940, p. 18.

- (61) FHG, IV, 523, frag. 1.
- (62) Hommel, S. 521.
- (63) Cf., Grohmann, op. cit., 1462, Anm.
- (64) 即ち Uranius の世に属する Aretas の basiléus と呼ばれ、hyiós であり、未だ登位前であることが示す。
- (65) 一説の年代より Head, Littmann: 62-47 B. C.; Cantineau: 62-50 B. C.; Levy, Hill: 62-60 B. C.; Grohmann: 62-60 B. C. (or 62-47 B. C.); Dussaud: C. 59 B. C. 等が与えられたが不安定である。
- (66) Cf., Dussaud, JA Xe série, tome III, p. 209.
- (67) 聖賢 philopatris, philodemos, qui amat populum suum, aimant son peuple, der seine Völker liebt 等と訳される。
- (68) Cf., Regner, op. cit., 1737; Cooke. p. 245. この語はローマの文脈から独立を維持しようとして Aretas IV の愛国的決意 (Cf., Josephus, XVI, ix, 9) の表現としての "philopatris" である語の真意であることが Litmann, IS, p. x; Cantineau, I, p. 5; P. Scott apud Robinson, p. 388) によることが明らかである。
- (69) Mommsen, V. S. 478, Anm. 1.
- (70) Cf., Regner, op. cit., 1737.
- (71) Cf., Dussaud, Les Arabes, p. 22.
- (72) 聖ヘラクリスと聖子相續が行われた (Str., XVI, 4, 25) なる Petra の世襲王家 (Ibid., 21) の同様である。
- (73) Head, p. 811.
- (74) Dussaud, JA Xe série, tome III, 1904, p. 192.
- (75) Mommsen, V, p. 478; cf., Grohmann, op. cit., 1463.
- (76) Cantineau, II, p. 6f., v=Dussaud, Pénétration, p. 33; cf., Sourdel, p. 113. 即ち G. Dalman, Neue Petra-Forschungen und der Heiligfelsen von Jerusalem, 1912.
- (77) Fevrier, p. 68, p. 168f, p. 177, p. 201~207; cf., Dussaud, Pénétration, p. 36~37; Starcky, Palmyre, p. 102~106.

p. 97.

- 〔86〕 Fevrier, p. 201f. Palmyra の五件、Petra の一件の他、Peiraeus のヘニキア人の碑文、Elephantine のアラム語陶片、Massilia の tariff 碑文等。
- 〔87〕 “en megalō oikō.” 但し “en megalō onkō” とする読みに従うなら、「盛大な規莫で」になる。
- 〔88〕 Dussaud, Pénétration, p. 31~34.
- 〔89〕 Cf. Starcky, Palmyre, p. 102, p. 106; Dura-report, XII, p. 157. このとき、Dura-Europos で発見された壁画 (Palmyra 群々への前ではなない) の “symposium”) の解釈をめぐって、MRZH 説と葬儀説とが対立するものとして述べられている。
- 〔90〕 Dussaud, Les Arabes, p. 5.
- 〔91〕 Littmann, IS, pp. xi f.
- 〔92〕 Ibid., p. 84, No. 105.
- 〔93〕 G. A. Cooke, p. 245.
- 〔94〕 Cantineau, II, p. 21f. x.=Cooke. p. 254, No. 101.
- 〔95〕 Cooke, p. 241, No. 94.
- 〔96〕 Ibid., p. 232, No. 88; p. 233, No. 89; p. 238, No. 92. Cf., Cantineau, II, p. 36, vii. その他、Littmann と Haurân 地方の Umm is-Surab の碑文 (A. D. 76) などの種の碑文と看做して補修した (IS, pp. 3f.)° cf., Cooke, p. 239.
- 〔97〕 Dussaud, Les Arabes, p. 124; de Vogüé, JA, IXe série, tome XI, p. 134; cf., Sourdel, p. 21; Littmann, IS, pp. 12~14.
- 〔10〕 de Vogüé, ibid., p. 134.
- 〔11〕 G. A. Cooke, p. 245.
- 〔12〕 de Vogüé, ibid., p. 137f.
- 〔13〕 Cf., E. O. James, op. cit., p. 80.
- 〔14〕 FHG, IV, 525 (Tzetzes, Hist., VII, 730.)

- (51) Hommel, S. 521.
- (91) Littmann, IS, p. XI, p. 6.
- (41) ハンテア期以前の Negeb 地方のついで「史学」34 の 3・4、一六七頁等参照。
- (81) Mayerson, BASOR, 153 (1959), p. 24.
- (61) Glueck, BASOR, 145 (1957), pp. 17f.
- (20) Glueck, Rivers, p. 244.
- (12) Ibid., pp. 225ff., p. 236, p. 274f.; cf., Cantineau, I, p. 20.
- (21) Glueck, Rivers, fig. 44; cf., fig. 38.
- (31) Ibid., pp. 272f. 阿拉伯の Jausseu, Savignac et Vincent, 'Abdeh, Revue biblique, 1904, p. 403~424; 1905, p. 74~84, 235~244.
- (22) Sourdel, p. 113f.; Glueck, p. 274.
- (23) Sourdel, p. 114; Glueck, p. 273.
- (26) Sourdel, p. 114; Littmann, IS, p. 41.
- (27) Dūsārēs 神 Zeus の神文の例であるが Syllaesus の Miletus の奉納碑文 (Cantineau, II, p. 45f.: anéthēken Diō Dousārei...) である。ハンテア入の Ba'al-shamīn やつちの神像 Dūsārēs 神の關係について 是程詳述する。 Cf., Grohmann, loc. cit., 1466; Dussaud, Pénétration, p. 47; Sourdel, p. 20.
- (128) Cantineau, II, p. 45, ii.
- (129) Cooke, pp. 247f., No. 96.
- (130) Malichus, II の神像 Littmann, Head: A. D. 40~75, Cantineau: A. D. 40~71, Cooke: A. D. 40~70.
- (131) Head, p. 812.
- (132) Cf., Mommsen, V, p. 478; Cantineau, I, p. 5.